

【報告】

一般市民が模擬患者として熟達する過程

篠崎 恵美子* 坂田 五月* 渡邊 順子* 阿部 恵子**
伴 信太郎** 藤井 徹也*

*聖隷クリストファー大学看護学部

**名古屋大学大学院医学系研究科

The process of standardized patient from novice to expert

Emiko Shinozaki*, Satsuki Sakata*, Yoriko Watanabe*,
Keiko Abe**, Nobutaro Ban**, Tetsuya Fujii*,

* Seirei Christopher University

** Nagoya University Graduate School of Medicine

抄録

本研究の目的は、模擬患者 (Simulated or Standardized Patient: 以下 SP) 養成において、SP が熟達する過程ごとの特徴を明らかにすることである。

対象は、2002 年から 2012 年まで SP 養成者が作成した SP トレーニング時、SP 参加型授業時の SP の発言・行動記録、SP 養成者の感想および介入の記録である。SP 養成過程は、ドレイファス・モデルを参考に、初心者、新人、一人前、中堅、達人のレベルとし、得られたデータを各レベルに分類し、特徴をカテゴリー化した。

その結果、一般市民であった SP が熟達する過程の特徴として、以下のカテゴリーが抽出された。初心者レベルでは<SP として不確実な自分>を感じ、新人レベルでは<SP として不安な自分>を感じる。さらに一人前レベルでは<SP として自覚が芽生える自分>を認識し、中堅レベルでは<SP として成長を感じる自分>を実感する。そして、達人レベルに到達すると<SP を極める自分>の存在を認識する。

キーワード：模擬患者、熟達過程、ドレイファス・モデル

I. 緒言

模擬患者 (Simulated or Standardized Patient : 以下 SP) とは、ある人の身体的・精神的・社会的な状況をリアルに演じることができるように訓練された一般市民のことである。もともとは一般市民であった人が SP となる過程には、SP を養成するためのトレーニングが必要である。わが国では、1975 年にカナダのマックマスター大学から Barrows により、SP という概念とそれを活用した医学・看護教育が紹介された (大滝、1993)。現在では、医学教育をはじめとする医療者教育において SP 参加型教育が増加してきている。現在 130 あまりの SP の団体があり、約 1000 名の SP が活動をしている現状があるが、SP の需要に対し、SP 数が十分であるとは言い難い現状がある。また SP の養成の方法は様々である。SP が様々な医療者教育において活動を継続し SP として熟達するためには、継続的なトレーニングと支援が必要不可欠である。しかし、継続的トレーニングと支援に関する報告などはない。そこで、本研究では、SP に対する適切なトレーニングと支援方法を検討するための、第一段階として SP 養成者の養成過程の記録から、SP の熟達の過程を明らかにし、養成者の支援について考察を加えて報告する。

II. 研究目的

本研究の目的は、SP 養成において、SP が熟達する過程ごとの特徴を明らかにすることである。

III. 研究方法

対象は 2002 年から 2012 年まで SP 養成者が

作成した 2 つの研究会の記録を分析対象とした。記録内容は、毎月 1 ～ 2 回開催される定期的な SP トレーニング時、SP 参加型授業 (医学部・看護学部) 時の SP の発言・行動記録、SP 養成者の感想および介入の記録である。

分析方法は以下のとおりである。

1. SP 養成過程について、ドレイファス・モデル (Benner, 1984) を参考に、初心者: トレーニング開始～ SP 参加型授業参加前後の 4 ヶ月間、新人: SP 参加型授業参加後～客観的臨床技能試験 (Objective Structured Clinical Examination 以下 OSCE とする) 参加前、一人前: OSCE 参加前後、中堅: OSCE 参加後～、達人の 5 つのレベルに分類した。
2. 記録された内容から、SP の発言・行動に関する記録、養成者の感想・介入内容を抽出した。さらに SP の発言・行動がどのレベルにいる SP のものかを確認した。
3. レベルごとに、抽出された内容は意味内容を変えないように要約してコード化し、このコードを相違点、共通点について比較分析することでカテゴリー化した。分析結果の厳密性については、1 名の研究者が分析したものを、他の 2 名の研究者間でディスカッションを行い、検討した。

ドレイファス・モデルは、技能の修得や上達において、熟達の 5 つのモデル、つまり、初心者、新人、一人前、中堅、達人というレベルを通過することを明らかにしたモデルである (Benner, 1984)。

用語の定義

本研究において、熟達過程とは「ドレイファス・モデルを参考に一般市民が SP として、初心者、新人、一人前、中堅、達人のレベルを通過し、技能を修得する過程」とした。

倫理的配慮

本研究は、SP 養成者が蓄積した記録の内容を分析対象とし、個人が特定される記述には十分に配慮した。また、SP 研究会が所属する施設長に承認を得て行った。研究会に所属する SP には、参加の自由等を説明し、また匿名性の保持やプライバシーの配慮等の約束をし、分析し報告することについて許可を得ている。

IV. 結果

分析対象となった記録の対象となる SP は、2つの研究会に所属する一般市民 27 人（男性 4 名、女性 23 名）である。2002 年～2010 年に SP として研究会に入会した者である（表 1）。

表 1 SP27 名の入会時期および年齢

入会時期	2002・2003年	5人	
	2004年	3人	
	2005年	2人	
	2006年	2人	
	2007年	5人	
	2008年	2人	
	2009年	5人	
	2010年	3人	
	年齢(記録当時)	20代	3人
		30代	7人
40代		4人	
50代		4人	
60代～		9人	

分析の結果、初心者レベルは 1 カテゴリーと 3 サブカテゴリー、新人レベルでは 1 カテゴリーと 3 サブカテゴリー、一人前レベルでは 1 カテゴリーと 4 サブカテゴリー、中堅レベルでは 1 カテゴリーと 3 サブカテゴリー、達人レベルでは 1 カテゴリーと 3 サブカテゴリーが抽出された（表 2）。以下カテゴリーは〈 〉、サブカテゴリーは『 』、コードは「 」の記号で示す。

初心者レベルは、研究会入会から授業参加前後の約 4 ヶ月前後、トレーニング回数は 4～5 回の時期である。このレベルでは、〈SP として不確実は自分〉がカテゴリーとして抽出され、以下の 3 サブカテゴリーから構成されていた。

「SP 同士のロールプレイに対する照れや戸惑い」や「人前で演技をすることに不安がある」など、演技をすることやその演技を見られることへの SP 自身の複雑な思いが記述され、『演技をする自分に対する複雑な思い』がサブカテゴリーとして抽出された。また「覚えた内容を全て忠実に答える」「質問に答えるというよりは、シナリオに書かれていることを一部そのまま話す」「シナリオに記載されている内容を一気に話す」など、SP の演技について養成者が感じた内容が記述から、『SP として演じることに不慣れ』が抽出された。さらに、「(フィードバックの冒頭に) 私の演技が良くなかったのかもしれませんが…」「私はちょっと緊張しましたが、みなさんよくできていました」「演技をするのに精いっぱい、(他者からの指摘に対して) あ、そうそう (とフォードバックする内容を思い出す)」「どういうふうにフィードバックしていいのかわからない」などフィードバックすることへの困難さの記述から、『フィードバックすることの困難さ』で抽出された。

新人レベルは、医学部等の授業参加前後の時期である。このレベルでは〈SP として不安な自分〉がカテゴリーとして抽出され、以下の 3 サブカテゴリーから構成されていた。

「以前に比べるとドキドキしなくなった」「(練習中) フィードバック内容は時間内にまとめることができる」「通常の学生さんのパターンには対応できるが、想定外の質問があると何

表2 熟達過程の各レベルにおける特徴

レベル	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
初心者	SPとして不確実な自分	演技をする自分に対する複雑な思い	・SP同士のロールプレイに対する照れや戸惑い ・人前で演技をすることに不安がある
		SPとして演じることに慣れ	・覚えた内容を全て忠実に答える ・シナリオに記載刺入れている内容を一気に話す
新人	SPとして不安な自分	フィードバックすることの困難さ	・「私はちょっと緊張しましたが、みなさんよくできていました」 ・「演技をするのに精いっぱい、(他者からの指摘に対して)あ、そうそう(とフィードバックする内容を思い出す)」
		限定された状況での慣れ	・通常の学生のパターンには対応できるが、想定が位の質問があると何を答えていいのかわからなくなる ・「以前に比べるとドキドキしなくなった」
		SPとしてデビューすることへの思い	・「授業参加を引き受けたものの、1週間前からドキドキしている」 ・「はたしてどんな結果になるのかしら・・・」 ・初授業でのフィードバック時に「上手く演技ができなくてごめんなさい」
一人前	SPとして自覚が芽生える自分	SPとしての自己肯定感の低さ	・自分の演技の不出来や失敗を発言
		SPとしてやりがい・充実感の実感	・「授業のあとに学生さんから感謝されて嬉しかった」 ・「学生さんの熱心さや真剣さから学ぶことが多い」 ・「シナリオにバリエーションをもたせてみました」
		SPとしての成長	・「フィードバックをしなくてもいいといわれると少しモチベーションが下がる」 ・「OSCEは評価するのだから責任重大ですね」
中堅	SPとして成長を感じる自分	SPとしての新たな役割の認識	・「もっとOSCEの練習がしたい」 ・「さきほどの学生さんは解釈モデルが聞き出せていなかった」 ・「上手い学生さんと下手な学生さんの差が大きかった」
		一般市民と教育者の感覚の逆転	・「OSCE3回目となると慣れてきた」
		SP活動の慣れ	・初心者や模擬患者さんへの指導や相談役をかってでる ・「私たちの演技へのフィードバックがもっとほしい」 ・「学生さんのためならどこへでも行きますよ。看護でも薬学でも」 ・他のSPのフィードバック内容に対して「それは私たちSPがフィードバックする内容でない」
達人	SPを極める自分	SPとしての自立	・「多少のトラブルなら大丈夫、なんとかできます」 ・SP間のささいなトラブルにさりげなく対応・根回しする
		SPとしての誇り	・「SPとしての資質って大切ですね」 ・「SPとして向く人と向かない人がいると思います」
		SPとしての挑戦	・他のグループでの研修会参加について「SPとしてお役に立てるなら、どこへでも行ってお話しますよ」

を答えていいのかわからなくなる」などの記述から、『限定された状況での慣れ』が抽出された。また、「授業参加を引き受けたものの、1週間前からドキドキしていた」「はたしてどんな結果になるのかしら」といった初めてSPとして授業に参加することへの思いが記述されており、『SPとしてデビューすることへの思い』が抽出された。そして、「(初めての授業でのフィードバック時に学生に対して) うまく演技ができなくてごめんなさい」「私の伝え方がよくなかったのかもしれない」と自分の演技の不出来や失敗を発言していた記録から、『SPとしての自己肯定感の低さ』がサブカテゴリーとして抽出された。

一人前のレベルは医学部等のOSCE 経験前後の時期である。このレベルではくSPとして自

覚が芽生える自分>がカテゴリーとして抽出され、以下の4サブカテゴリーから構成されていた。

「授業のあとに学生さんから感謝されて嬉しかった」「学生さんの熱心さや真剣さから学ぶことが多い」などの発言から、『SPとしてやりがい・充実感の実感』が抽出された。「シナリオにバリエーションをもたせてみました」「フィードバックは難しいけど、フィードバックをしなくてもいいといわれると少しモチベーションが下がる」などの発言の記録から、『SPとしての成長』が抽出された。さらに、「OSCEは評価するのだから、責任重大ですね」「もっとOSCEの練習がしたい」などの発言の記録から、『SPとしての新たな役割の認識』が抽出された。その一方では「さきほどの学生さんは解

積モデルが聞き出せていなかった」「頭痛の部位が聞けていない」「上手い学生さんと下手な学生さんとの差が大きかった」など、教員が発言するような内容にまで発言が及んでおり、『一般市民と教育者の感覚の逆転』も抽出された。

中堅のレベルでは、OSCE 参加後の SP である。〈SP として成長を感じる自分〉がカテゴリとして抽出され、以下の3サブカテゴリが抽出された。

「OSCE 3 回目ともなると慣れてきた」「今回の OSCE は気がのらない」「評価する先生が OSCE 初めてだったから、頼られちゃった」「初心者の模擬患者さんへの指導や相談役をかってでる」などの記述から、『SP 活動の慣れ』が抽出された。「私たちの演技へのフィードバックがもっとほしい」「学生さんのためなら、どこへでも行きますよ。看護でも薬学でも参加しますよ」などの発言からは、『SP としての成長への欲求』が抽出された。「(他の SP のフィードバック内容について) それは、ファシリテーターのフィードバックすべき点で、私たち SP がフィードバックする内容ではない」などの発言から、『SP としての役割の再認識』が抽出された。

達人のレベルでは、〈SP を極める自分〉がカテゴリとして抽出され、以下の3サブカテゴリが抽出された。

「多少のトラブルなら大丈夫、なんとかできます」「SP 間でのささいなトラブルにさりげなく対応・根回しする」「この時間については任せておいてくださいね」などの記述から『SP としての自立』が抽出された。また「SP として向く人と向かない人がいると思います」「SP としての資質って大切ですね」などの発言もあり、『SP としての誇り』が抽出された。「(他のグループでの研修会への参加について) SP と

してお役に立てるなら、どこへでも行ってお話ししますよ」などの発言があり『SP としての挑戦』もサブカテゴリとして抽出された。

V. 考察

熟達とは、ある程度一般化できる特徴が存在し、熟達者とは「特定の領域で、専門的なトレーニングや実践的な経験を積み、特別な知識や技能を持っている人」のことをいう (Ericsson, 2008)。SP がますます医療者教育の場において、重要な役割を担うことを考えると、SP の熟達のプロセスを明らかにすることは、SP 養成を行う上で重要なことである。Dreyfus (1983) は、初心者が熟達者になるまでには、5つの段階を経てスキルを獲得すると述べている。また、「各領域において熟達者になるまでには、最低でも10年の経験が必要である」という10年ルールが提唱されている (Ericsson, 1996)。つまり、ドレイファス・モデルでの最終段階である熟達者になるまでには最低10年の準備期間が必要であるということになる。過去10年間の SP 養成の過程から、抽出された特徴について5つの過程ごとに考察する。

初心者のレベルの SP は、〈SP として不確実な自分〉をトレーニング中に表現する。初めてロールプレイを練習するときには、養成者や他の SP などの人に見られることに照れや戸惑いをみせるが、一回演じてみると、「なんとかできる」と演技について不安が軽減するようである。実際の演技は、覚えたことを忠実に(シナリオどおりに) 答えようとする。そのため、質問された事を十分に受け止めて答えるというよりは、シナリオの一文をそのまま答える、つまり覚えたことを全て口にする傾向になる。フィードバックに関しては、演技をするこ

とに精一杯であるため、演技終了時にすぐに「事実について感じたこと」を思い出す事ができない。自分の演技の不出来をまず述べることもこの時期の SP には多い。また、改善点がみつからない、他者から指摘されてから思い出すこともあり、表現に困惑している段階である。これらは全て原則論に則った行動であり、限定的で柔軟性に乏しい時期としてドレイファス・モデルの「初心者時期」の特徴を示している。初心者は与えられた状況に直面した経験がないため、養成者が実践を導く原則を示すことが必要であろう。

新人レベルでは、＜SP として不安な自分＞を表現する時期である。授業に初めて参加する、つまり SP としてデビューするという一大イベントを控えている時期である。トレーニングという限定された状況においては、フィードバックを短時間でまとめることができ、表現に困惑する段階を乗り越える。しかし授業前になるとやはりデビューすることへの不安と期待が入り混じった発言がきかれる。実際に初めて学生と行ったセッション後のフィードバックでは、「上手く演技ができなくてごめんなさい」「どのような言い方がよくて、どの言い方が悪いのかわからない」にみられるように、自分の演技の不出来や失敗を口にだしてしまう傾向にある。これらは、デビュー初期の SP に共通してみられることであるが、SP としての自己肯定感の低さや当惑によるものと考えられる。これらのことは、回数を重ねることで、演技の自信がつき、また、様々な患者がいてよいということがわかり、シナリオどおりに演じることができず失敗したのではなく、「そういう患者であった」と思えるようになり、口にしなくなる。

この時期は実際に何回も繰り返し練習することで、練習内容が一種の基準や原則となる。

したがって、練習した内容については想起が容易であるが、学生からの質問や展開が SP の予想外の領域に及ぶと、その状況をつかむことができず、その状況を認識するために多くの時間を費やす。しかし、この経験は次のステップに移行する為には必要なことである。なぜならば、この時期の SP は一般的な原則に頼っているが、状況の把握に困惑した経験内容が、再び同じように想定外のこととして起こったときには、その状況が認識可能となり得るからである。養成者はデビューを通して、現実の状況に対応、その状況において繰り返しおこり、しかも意味のある状況的要素に注目することを指摘することが必要であろう。

一人前のレベルでは、＜SP として自覚が芽生える自分＞を認識する時期である。自らの演技にバリエーションを持たせようとしたり、服装や小道具などを活用し気分を変えようとしたりするなど、ただ演じるだけではなく、演技に幅をもたせようとしていることが伺える。教育に参加することで、学生と触れ合うことの嬉しさを感じ、さらにその学生に対しての思いやりの言葉も発せられる。フィードバックに関しても、経験の積み重ねからの自分なりの基準を持ち、それらをもとに学生の評価をしている。初心者や新人レベルのように、自分の演技や役割を果たすことに精一杯な状態ではなく、学生や周りを見る余裕がある。またこの時期には初めて経験する OSCE に対しての不安を感じながらも、評価者であるということを認識し、SP として新たな役割を認識する時期でもある。さらにこの時期は、一般市民であった SP が、コミュニケーションや医療面接に関する知識が増えてくるため、時に、フィードバックに「解釈モデルが聞けてなかった」「頭痛の部位を聞いていなかった」など、ファシリテーターの

フィードバックすべき内容にまで言及することもしばしばある。そもそも SP に求められるものとして、一般市民としての感覚というものがあるが、SP としての経験を重ねるにつれ、一般市民の感覚と教育者としての感覚が逆転してしまう時期でもある。あくまでも一般市民と教育者の間にたち、両者をつなぐ役割を果たしていただくためにも、ダブルシンク（二重思考）を意識していかなければならない時期でもある。Benner（1984）は、同じ状況もしくは、類似した状況で2～3年活動をしているものを一人前としている。一人前は、新人レベルより技能は上だが、中堅よりは未熟である時期であり、成長し続けることでさらなるステップへ向上できると考える。一人前の時期は、SP 自身で目標や計画をたてて、意識的に活動ができる時期であり、次のステップ「中堅」のようなスピードや柔軟性には欠けるが、統率力を持ち、多くの偶発的な出来事に対処し、管理する能力をもつため、その点を承知したうえで、養成者が適度に関わることが必要である。

中堅レベルでは、＜SP として成長を感じる自分＞を表現する時期である。OSCE に対しての不安感は訴えなくなる。自分の演技と評価に必死というよりも、OSCE 全体がみえてきていることが伺える。この時期に看護教育への参加や、目的の異なる講義（医療面接以外）に参加するなど新たな経験をするときには、「学生さんのためなら、参加しましょう」と承知するものの、未経験であるため、少し戸惑いを示すときもある。しかし、慣れてしまった医療面接よりも「新鮮である」といった感覚もいただくため、同時に OSCE 練習を組む場合、「今回の OSCE は気がのらない」の言動がみられるように、OSCE 練習に気持ちが向かない場合もある。入門者や新人の SP に対し、進んで指導していたり、相

談者となったりしている。経験年数を重ねてきたため、他の SP からの信頼を得ており、SP 養成者の相談役ともなる場合もある。メンバーの中での自分の位置付け、役割も十分に認識した行動がみえる。SP 間でのトラブル時には、さりげなく対処していたり、根回ししたりする。このように SP としての活動に慣れが生じているのと同時に、SP としてさらに成長したいという欲求が現れてくる。また、一人前レベルの SP がフィードバック時にファシリテーターが評価すべき内容まで言及した際には、「それは私たちの評価することではなく、ファシリテーターの先生が言われることだから」と、SP としての役割を正しく認識していることを示す言動がみられる。SP 入門時に一般市民だった感覚から、一時は医療者の感覚に陥るが、この時期にくると、一般市民と医療者をつなぐ位置付け、本来の SP の位置や役割を再認識できている。

この時期には、養成者は、質の高い経験をやる機会を提供することが必要である。

達人レベルでは、＜SP を極める自分＞の存在を認識する時期である。今回達人レベルの対象となった SP は少ないという点で一般化には限界があるが、この時期の SP は、状況を理解して適切な行動と結びつけていく際に分析的な原則（ガイドライン、ルール）には頼らない。達人レベルの SP の背後には豊富な経験があるので状況を直観的に把握していく。SP として自立するだけでなく、質の高い経験を積み重ねてきたことにより、SP としての誇りを感じ、さらに成長し続けるために、挑戦する時期である。Ericsson（2008）はある領域のエキスパートを養成する過程では、特定のレベルにおいて適切な学びの機会の提供が不可欠であると述べている。SP として成長し続けるためには、そのレベルにあった課題と向きあい、乗り越える

ことであろう。つまり、達人レベルであっても、達人レベルの乗り越えるべき課題があり、それに向き合うことが挑戦であると考え。したがって、養成者は、達人レベルの SP を尊重しながらも、そこにとどまるのではなく、新たな課題を提供することが必要である。

VI. 結論

SP の熟達の過程は以下のものであった。

初心者レベルでは<SP として不確実な自分>を感じ、新人レベルでは<SP として不安な自分>を感じる。さらに一人前レベルでは<SP として自覚が芽生える自分>を認識し、中堅レベルでは<SP として成長を感じる自分>を実感する。そして、達人レベルに到達すると<SP を極める自分>の存在を認識する。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力くださった模擬患者の皆様に心より感謝いたします。

引用・参考文献

阿部恵子, 鈴木富雄 (2011): よくわかる医療面接と SP, 名古屋大学出版会, 名古屋.

Benner, P. (1984): From Novice to Expert; Excellence and Power in Clinical Nursing practice, 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳 (1992), ベナー看護理論 - 達人ナースの卓越性とパワー, 医学書院, 東京.

Dreyfus, S. E. (1983): How Expert Managers Tend to Let the Brain. Management Review, September, 56-61.

Ericsson, K. A. and Lehmann, A. C. (2008): Expert and Exceptional Performance: Evidence of Maximal Adaptation to Task Constraints, Annual Reviews, Vol. 47, 273-305.

Ericsson, K. A. (2008): Deliberate Practice and Acquisition of Expert Performance: A General Overview, Academic Emergency Medicine, Vol. 15, No. 11, 988-994

大滝純司 (1993): SP を使った面接法; 日本での試み, 日本の看護教育への SP 導入の意義, 看護展望, 18 (8), 897-899.